

*Raffiné Journal vol.06*

人の物語を、  
少し自分として見てしまう

誰かの出来事なのに、  
どこか自分のことのように  
見えてしまう瞬間がある。

その視線は、  
外に向いているようで、  
まだ起きていない内側に触れている。

ある場面を見ていて、  
違和感だけが残った。

出来事そのものではなく、  
そこに向けられている視線のほうだった。

耳の聞こえない人が、  
同じように耳の聞こえない人と  
健常者の関係を見ている。

その見方は、  
外側から眺めているものではなかった。

出来事の外に立っていない。

そこに起きている流れの中に、  
自分の位置がわずかに含まれている。

だから視線が離れない。

似た立場の人の選択だけが、  
なぜか通り過ぎない。

そのまま外に置かれず、  
内側に残る。

見ているはずのものが、  
どこかで混ざる。

同じ職業、同じ年齢、似た環境。

その人の結果だけが、  
なぜか切り離されない。

出来事の大きさと関係なく、  
そこだけが内側に残る。

うまくいく流れは、  
理由なく安定した感覚を残す。

崩れていく流れは、  
説明できない揺れを残す。

その差は、  
出来事の外側にはない。

どこかで、  
自分の側に触れている。

人は、他人を見ているのではない。

そこに起きている流れの中に、  
まだ確定していない自分の配置を見ている。

他人の物語は、  
外にある出来事ではなく、  
内側に入り込んでくる構造である。

人は、  
他人の物語を見ているのではない。

そこに置かれた、  
自分の可能性を見ている。

R.

Raffiné Journal vol.06  
2026

美学思想家  
古川玲奈

発行：Raffiné